

Title	日本歌學大系(佐々木信綱編, 文明社出版): 特に『和歌體十種』について
Sub Title	
Author	保坂, 三郎(Hosaka, Saburo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1941
Jtitle	史学 Vol.20, No.1 (1941. 7) ,p.178- 181
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19410700-0179">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19410700-0179</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 書 評

## 古事記諸本解題

(國幣中社 志波彦神社編纂)  
(鹽竈神社編纂)

民族の一人として生をうけ、その生を全うするためには、民族精神を體得せねばならぬのはいふまでもない。さうしてそれには民族精神の淵源をきはめることが必要であり、そのためには古典の研究が必須條件でなければならぬ。本書はその古典の随一たる古事記の研究参考のために編纂されたものであつて、(一)古寫本、(二)刊本、(三)註釋書、(四)諸說、(五)雜誌所載諸說、(六)索引の六部に分れ、古今に互る古事記研究の参考書及び諸說をあげ、参考書には解説を附したものであつて、古事記研究には誠に便利な指針であり、學徒を益するところ大なるものがあるであらう。しかしながら雜誌所載諸說のごときは、ことごとくこれを網羅することは甚だ困難であつて、往々にして脱漏誤謬をきたすのであり、本書においても若干の不備はまぬかれなかつたやうである。例へば評者自身の執筆に關するものだけについて言つても、本書一六二頁に、古事記の撰録について史學雜誌昭和二年十二月(第三十八編第十二號)とあるけれども、これは史學第六卷第三號(昭和二年九月)のあやまりであり、また一七三頁に、日本神話の地理的考察として、史學第十一卷第三號と歴史教育第七卷第十二號

と兩方をあげてゐるけれども、これは前者が正しく、後者は或は『神話學よりみたる日本古代史』(歴史教育第八卷第一號、昭和八年四月)のまちがひではなからうかと思はれる。なほ評者執筆の『古事記論の一節』(川合教授還歴記念論文集昭和六年十二月)のごときも、當然採録されるべきものと思ふ。もちろんこれらほとるにたらぬ瑕瑾にすぎないであらうけれども、本書の完璧を期する上から補正をねがつてやまない。(松本芳夫)

## 日本歌學大系

(佐々木信綱編)  
(文明社出版)

特に『和歌體十種』について

歌學は、その初に當つては、支那の詩學の影響を受けて起つたものであるけれども、その研究の對象とする歌が、我が國特有のものであるに由り、遂に我が國純粹の學問として發達するに至つた。日本の人々が、歌を通じて、文學を如何に觀、如何に感じたかは、歌學の書物に由つて知ることが出来る。歌學があつて、始めて我が國の人々が、一切の事物に對して、その觀方や感じ方を學んだとも云へる。例へば、幽玄とか風情とかいふやうな美的意識を表す言葉は、歌學の上に起つた言葉であつた。かやうに歌學は、我が國人の文學的生活の記録ともいふべきものである。今その大系の刊行せられるに至つたのは、寧遅かつた次第である。ひとり歌を愛好する者のみならず、我が國の精神思想の上に思を寄せる者にとつても、必讀の書といふべきであらう。

以上は「日本歌學大系」によせられた武田祐吉博士の推薦の辭

である。誠に然りであり吾人はこの書の如き地味な全集が出版されるに到つたことを有難く思ふものである。尙武田博士はここには觸れて居られぬが、歌學書は單に以上に止まらず、古歌の難義を解釋することにもなつた爲、當時の學者の國語に對する智識の程度又國語を研究するに如何なる主義原理を立てて臨んだかといふことを知る可き資料としても役立つのである。さればこれは我が言語學研究に非常に大きな役割をなす資料なのである。扱今迄配本になつた第一卷、第二卷の目錄を示せば次の如くである。尙この一々に解説のあるのも讀者に便を與へるものである。

第一卷 中古編(上)

歌經標式(眞本)	藤原 濱成
歌經標式(抄本)	藤原 濱成
和歌 作式	喜 撰
和歌 式	孫 姫
石見 女式	
新撰萬葉集序	菅原道眞等
古今和歌集兩序	紀貫之等
新撰和歌序	紀貫之
和歌體十體	壬生忠峯
和歌十體	源道濟
類聚 證	藤原實賴
新撰和歌髓腦	藤原公任
新撰髓腦	藤原公任
九品和歌	藤原公任

歌枕(略本)	能因
歌枕(廣本)	能因
隆源口傳	隆源
俊賴髓腦	源俊賴
奧義抄	藤原清輔

第二卷 中古編(下)

袋草紙上卷(袋草紙)	藤原清輔
袋草紙下卷(袋草紙遺編)	藤原清輔
和歌初學抄	藤原清輔
和歌童蒙抄	藤原範兼
贈定家卿文	西行
西行上人談抄	蓮阿
歌仙落書	
續歌仙落書	
千載和歌集序	藤原俊成
慈鎮和尙自歌合(十禪師跋)	藤原俊成
古來風體抄	藤原俊成

扱以上のうちから私が必要にせまられて、特に讀んだ、和歌體十種(壬生忠峯)について少しく批評してみたい。元來かゝる書物はあくまで原本に忠實でありたいと私は望む。この程度の本を讀む人はむやみに假名に漢字をあてられることよりも、假名はそのまゝにしておいてもらひ度いものではあるまいか。編者は「右以安田家藏古寫本書寫云々」とあるから所謂「傳御子左忠家筆」本によつたのであらうが、原本の古歌體の一に

をかき整らへる能みま、支爾あるま、毛  
とれ者そな徒久こなかとれ  
とあるものを編者は

小笠原へるのみ牧にあるま、馬もとればぞなづくこなが袖とれ  
と改めてしまつてゐる。この場合原本に「ま」とあるものを「馬」  
の字をあてゝあると「ま」なりや「うま」なりやわからない。我  
々はむしろ現今の智識で「うま」と知らず／＼讀むくせがある。  
かゝる不注意が古來幾多の異本を生じさせたのである。「ま」とあ  
ればその頃支那晋でそのまゝ「ま」とよむだことも一目してわか  
り、又阿卷に掲載せる道濟の和歌十體の方には「駒」といふ字が  
あてゝあるが、これも「ま」とよむべきことがその原本にどうあ  
らうと察せられるのである。こんな點に編者は普及をのぞまれた  
爲か、あまりにも通俗に過ぎ、嚴格さを失はれてゐるのである  
まいか。

神妙體の「我が君は千代にましませざれ石の巖となりて昔の  
むすまで」とあるのにしてもさうである。原本には「さされし」  
とあるのである。「さざれ石」ではないのである。今の我々には「石」  
とあれば「いし」とよまざるを得ぬ重要な理由もある。古語にお  
いては「さされし」か「さざれいし」かを考へるときこの例は「さ  
されし」と讀む資料の一として擧げられる可き位置にあるのであ  
る。我々は後世の寫本で常識的になつて讀みならはしてゐる言葉  
が、たま／＼古い寫本によると意外な位それが後世の誤つたよみ  
方であることに氣がつくことが屢ある。ことによくあることであ  
るが濁點の如きは古いもの程わからないのに個人の見解で勝手に

にぞりを打つてしまふがこれも忠實な史料の紹介とは云へないと  
いつも私は感じてゐる。「ことばだみたる」を殊更に嫌つた時代も  
あるのである。こんな重要なわかれ目さへを考へるにも役立つや  
うな慎重さで私はこの大系も編纂してほしかつた。事實私はこの  
『和歌體十種』に關してはふに落ちかねたのでやはり複製本によ  
らざるを得なかつたのである。このやうな例は他にも散見する。  
例へば餘情體の「今來むと」の歌の下の句に「待ち出づるかな」  
とあるものは原本では「まちてづるかな」とある。これを何故「待  
ち出づるかな」にされたか理由がわからぬ。私は「まちてづるか  
な」とある方がはるかに歌としてままとまつてゐてよいと思ふし、  
原本にさうあるものを改めねばならぬことは全然あるまい。もし  
それ程の理由があるならば本文はあくまで原本に従ひ「まちてづ  
るかな」として、註にでもしていただければよかつたと思ふ。

又この書を壬生忠岑の作と斷じて掲載してゐるのであるがこれ  
も少しく早計ではあるまいか。忠岑程の人が官位のやかましい當  
時先師土州刺史と貫之をよぶやうな不見識さは私には考へられな  
い。内容に示す歌は或は忠岑の十體を傳へるものであるかも知れ  
ない。他の史料とも合致すること等からもそれは一應肯定もせら  
れるが、私は少くとも序文は貫之の土佐日記がやうやく一般に行  
はれ貫之と土佐とがはなれられぬ觀念になつた頃作爲されたとも  
考へられると思ふ。土佐日記は土州刺史を辭めて京都に歸る時の  
日記である。決して死んだ時の官位が土州刺史だつたのではない  
のである。又傳によれば貫之は天慶九年に卒してゐるのであつて、  
序の如く天慶八年冬十月に先師とあることは今迄の傳記とも矛盾

を生じてゐる。私の現在の知見ではこの點どちらをとる可きか斷ずべき史料も持たぬが、少くともこれだけの疑は充分生ずるのである。

又この寫本は平安朝のしかもあまり降らない頃のものとみとめる學者もあるが、書風は正に所謂高野切の或る種のものに似てゐるが、しかし少しく注意してみるとこの寫本の出來た當時には相當に假名の書體が變つてゐる爲古い書體が忘れられ、その爲型だけを眞似てゐる様な所が隨所にみられる。これはこの傳御子左忠家筆本が古い本によつた事の證にはなるが、この寫本のなされたのは甚しく時代の下るものであることも考へられる。

要するに私はこの種資料を出版するに當つては如何に大家であつても、誰がみても誤であることが明白であつても、原本の誤はそのまゝ誤れるまゝ出版する可きであると思ふ。まして假名に漢字をあてたり、甚しきは文を變更するが如きは見識ある如くにして見識あるものと云ふことは出來ないと思ふ。何故なら誤解として誤解の起る所以を研究する資料にもなり、そこに時代の背景を考へるに重要な要素のひそんでゐることもあり、ひいてはその寫本の作られた年代を考へることも出來るのである。又誤解なりと斷ずるのは既に研究の域にあるもので、資料の紹介の域を脱してゐるものと云ふ可きであらう。その位にしても編纂者の見解が何處かにあらはれて來るものである。又解説するに當つては疑は疑として、矛盾は矛盾として指摘していたゞき度いものである。さきに云へる如き貫之の官位の如き、没年の如き、いかにこの資料が種本であらうと批判すべきは批判し、疑は疑ひとして止めてお

て將來の研究に俟つことにする可きであると思ふ。そこに於て正に見識を見る可く、黑白の何れかに早く處理するのが見識ではないと私は信ずる。

稀にみる善且大刊行書である爲私の期待する所も大きく、甚だ言禮を失するの傾あるやを怖るゝものである。とかく物資の不足の折柄本大系の完成を心から祈る次第である。(保坂三郎)

## 渡邊華山

(森、銃三著  
創元社揚行)

昨年百年祭が行はれた關係もあつて、渡邊華山を扱つた書物を最近特に多く見うける。小説にもなり、劇化もされた。その上に今また傳記研究家森銃三氏の一書を加へたのである。

これは寧ろ意外なことなのであるが、この書の著者森氏によれば、今日までに公にされた華山研究の中で、彼の事歴については全集所收の系譜を祖述するより一步も出てゐないのださうである。さうした不振の華山傳研究に大きな寄與をした「全樂堂記傳」の發見は實に森氏の業績の一つであつた。氏が昨年邊り雜誌傳記誌上に華山に關する短編を載せてゐられたのを拜見したが、其等を集大成してこの書が成つたのであらう。かうした纏緯からも、本書が注目すべき華山傳であることはたやすく諒解出來やう。

順序として、簡単に内容を紹介しよう。編次は立てられてゐないが、大體七編に分けられる。最初の「華山の生涯」・「華山とその母」の二編は謂はゞ華山傳概説。次の「華山雜考」は華山の名聲の讀み方、華山と華山の區別から父母兄弟妻子師友のことを述べ